

能登半島地震 被災者支援

ヤドカリプロジェクト 活動成果報告書

フォーム受付データにもとづく活動の記録

「住まい」と「暮らし」を、被災されたみなさまへ。
本報告書は、各種申込・問い合わせフォームに寄せられた声を集計し、支援者・協力者の皆さまとともに歩んだ活動の成果をまとめたものです。

集計対象期間：2024年1月～2026年4月（主要活動：2024年1月～6月）

受付チャネル：8フォーム／総受付 259件

発行日：2026年6月4日

1. エグゼクティブサマリー

ヤドカリプロジェクトは、2024年1月の能登半島地震を受け、被災された方々に「仮住まい（宿泊・住居）」と「生活物資」を届けるために立ち上がった支援活動です。全国の宿泊事業者・物件オーナー、寄付者、協賛企業の皆さまのご協力により、発災直後から多くの被災者を支えることができました。本報告書は、活動を支えた受付フォーム8種・計259件のデータを集計したものです。



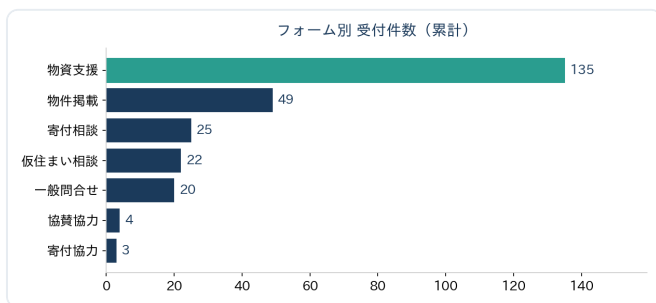
※「寄付・協賛・協力」= 寄付相談25+協賛協力4+寄付協力3。仮住まい相談22件、一般問い合わせ20件、アンケート1件を含め総計259件。

3つの成果

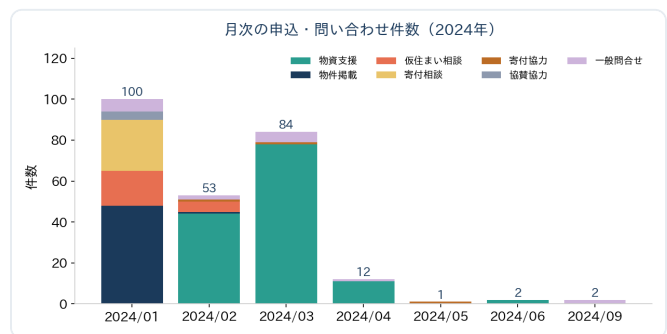
- ① 住まいの供給を確保：宿泊事業者・オーナーから49件の物件提供を受け付け、被災者22件の住まい相談に対応する受け皿を構築。
- ② 暮らしを直接支援：物資支援135件のうち97%が被災当事者からの申込。寝具・生活消耗品・食品を中心に必要な品目を可視化。
- ③ 支援の輪が拡大：寄付・協賛・協力の申し出が32件。資金・モノ・場の三方向で活動を後押しいただいた。

2. 活動全体の動き

受付チャネル別の件数



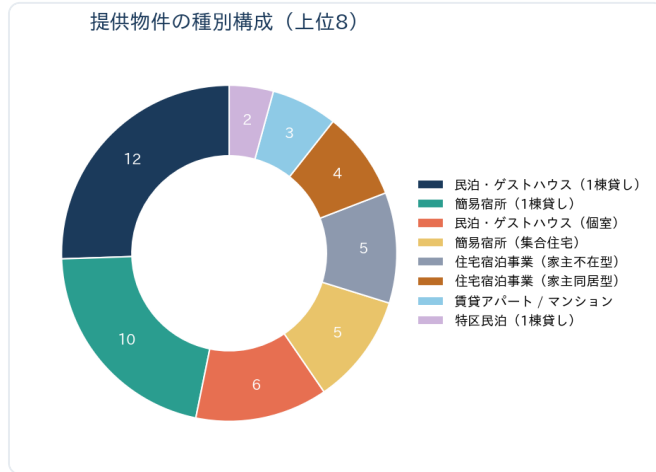
月次の推移



発災直後の2024年1月に100件が集中し、まず「住まいの確保（物件掲載48件）」と「寄付の受付（25件）」が立ち上がりました。続く2〜3月は物資支援が主役となり、避難生活の長期化に伴う生活再建ニーズへと支援の重心が移っていったことが読み取れます。フェーズごとに必要とされる支援が「住まい → 物資 → 生活再建」と変化した実態を示しています。

3. 住まいの支援 — 供給と需要

提供物件の種別（供給：49件）



住まい相談の傾向（需要：22件）

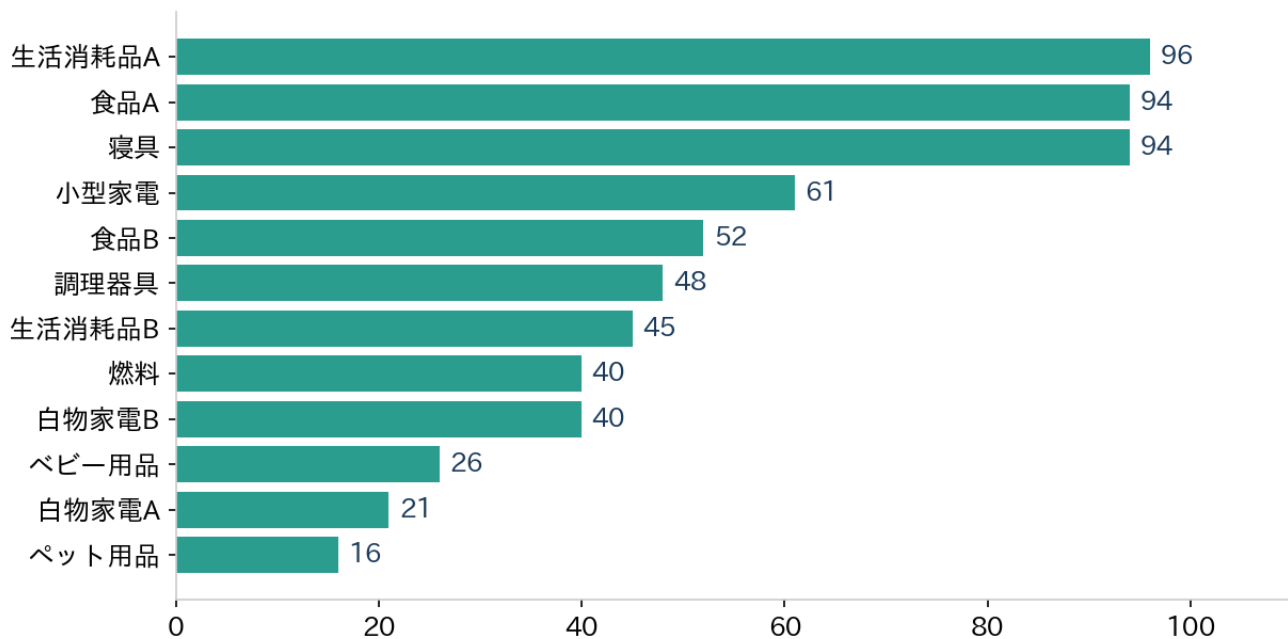
相談者の希望エリアは石川県が大半を占め、被災地近接での生活継続を望む声を中心でした。世帯構成は単身から大人4～5名、子ども連れまで幅広く、ペット同伴世帯からの相談も寄せられました。紹介経路は「知人からの紹介」が最多で、信頼の連鎖で支援が広がった様子がうかがえます。

項目	傾向
希望エリア	石川県が中心
世帯規模	単身～大人4～5名・子連れ
ペット	同伴希望あり（犬・猫）
主な認知経路	知人紹介・HP・施設一覧

提供物件は民泊・ゲストハウスと簡易宿所が中心（合算で全体の半数超）。1棟貸し・個室・集合住宅など多様な形態が集まり、世帯規模やペットの有無に応じた柔軟なマッチングを可能にしました。滞在可能期間は「7日～1ヶ月」「上限なし」など幅広く、短期避難から中期的な生活再建まで受け止められる供給構成となりました。

4. 暮らしの支援 — 物資支援の内訳

物資支援で求められた品目（複数選択・上位12）



物資支援の申込135件のうち131件（約97%）が被災されたご本人・ご家族からの申込で、支援が確実に当事者へ届く設計であったことを示します。求められた品目は生活消耗品（96件）・寝具（94件）・食品（84件）が突出し、避難生活で最初に不足する「眠る・清潔を保つ・食べる」を支える基礎物資への需要が明確でした。炊飯器・レンジ等の小型家電（61件）や調理器具（48件）も多く、「配給を受ける」段階から「自分で煮炊きする生活」を取り戻す段階への移行ニーズも表れています。引き渡し拠点は金沢・加賀・輪島など石川県内に広がりました。

支援フェーズ	代表的な品目	意味するニーズ
初期（命と衛生）	寝具・生活消耗品・食品	避難直後の生存・衛生確保
中期（自炊の回復）	小型家電・調理器具・燃料	日常の食生活の再建
個別（家族構成別）	ベビー用品・ペット用品	子育て世帯・ペット同伴世帯への配慮

5. 支援の輪 — 寄付・協賛・協力

活動を資金・モノ・場の面から支えてくださった申し出は計32件にのぼります。寄付相談25件のうち多くが「掲載してよい（公表可）」との回答で、支援の可視化に前向きな協力者が多かったことが特徴です。協賛・協力の申し込みも寄せられ、個人の善意から事業者の組織的支援まで、多層的な支援基盤が形成されました。

区分	件数	主な内容
寄付の問い合わせ	25	資金・物品の寄付相談（多くが公表可）
協賛・協力の申し込み	4	事業者・団体からの協賛
寄付・協力の申し込み	3	継続的な協力の申し出
一般問い合わせ	20	運営協力・ボランティア・メディア等

6. 考察と次の一步

見えてきたこと

本データは、災害支援において「住まい」と「物資」の需要が時間とともに移り変わることを明確に示しています。発災直後は住まいの確保、その後は生活物資、そして自炊・生活再建へと、被災者のニーズは段階的に変化しました。ヤドカリプロジェクトは、宿泊事業者という地域の遊休資源（空き物件）を被災者の住まいへ転換する仕組みで、この変化に柔軟に対応できた点に独自の価値があります。

今後に向けて

- ・供給と需要のマッチング精度向上：物件49件・相談22件のデータを基盤に、エリア・世帯規模・ペット可否での即時マッチングを仕組み化。
- ・物資ニーズの予測活用：「寝具・消耗品・食品 → 家電・調理器具」という移行パターンを、次の災害時の初動調達計画に転用。
- ・支援者コミュニティの維持：公表可の寄付者・協賛者との関係を平時から継続し、次の発災時に素早く動ける体制へ。

支援者・協力者の皆さまへ

この活動は、空き物件を快く差し出してくださったオーナーの皆さま、物資と寄付を寄せてくださった全国の支援者の皆さま、そして協賛・協力をいただいた企業・団体の皆さまの善意によって成り立ちました。259件という数字の一つひとつに、被災された方を思う気持ちが込められています。心より御礼申し上げます。これからも「住まいと暮らしを取り戻す」ための活動を続けてまいります。

本報告書はフォーム受付データの集計に基づき作成。件数は受付ベースであり、成約・配送完了等の実績とは異なる場合があります。個人情報（氏名・連絡先）は集計のみに使用し本書には記載していません。